玄海灘の向こうから〈日本文学〉を読む
——尹相仁（ユン・サンイン）著『文学と近代と日本』——

朴貞蘭（パク・ジョンラン）

まずは本書の目次と著者のプロフィールを挙げておく。以下引用を含めて本書の記載事項は、筆者が翻訳を行った。なお、本レビューでは、主に第1部と第3部をピックアップして紹介する。

【目次】

序文
第1部　韓国人と日本文学
韓国人にとって日本文学とは何か
脱植民主義時代の日本文学を読む
異種交配時代の日本文学
日本小説はある

第2部　日本文学と近代
明治時代の文学と天皇制
夏目漱石と帝国主義
明治期の知の言説と国民作り
私小説のイデオロギー
翻訳と国家
日本現代文学とアメリカ
　—「パクス・ジャメリカーナ」の夢
日本近代文学と医学
川端康成の『雪国』
国民のなかの『心』—国民国家イデオロギーと正典

第3部　玄海灘断想
デカダンスの復権
　—逸脱と倒錯をめぐるグロデスクな冒険
受難物語の誘惑—『ヨーコイヤギ』と民族主義
「在日文学」の条件
在日韓国人文学と「名前」の政治学
イデオロギーの翻訳、翻訳のイデオロギー
　—黄晳暎の『客人』
遠くから近くを見ること
侍はいない
文学の倫理—井上ひさしと「草根」の声
贖罪としての書くこと— 津島佑子の日本近代文学批判
島田雅彦、或いは優しい左派
大江健三郎の訪問記

◎著者プロフィール

尹相仁（ユン・サンイン）

1955年韓国群山生まれ。西江大学校国語国文学科卒業。東京大学大学院比較文学比較文化専門課程博士課程修了（学術博士）。ロンドン大学客員研究員。京都・国際日本文化研究センター外国人研究員。現在、韓国漢陽大学校日本言語文化学部教授。著書に『世紀末と漱石』（岩波書店、1994年、サントリー学芸賞）の他、多数。

1　韓国における日本文学の翻訳と受容

2009年5月29日の発売から、2カ月で200万部を超えるベストセラーとなった村上春樹の長編小説『1Q84』（新潮社）は、海を渡った韓国においても、発売の前からシンドロームを巻き起こしていた。多額の印税の一部を著者に前払いするアドバンス制による版権獲得競争で話題を呼んだこの小説は、韓国大手の出版社「文学トンネ」（「文学村」という意味）から、BOOK1とBOOK2がそれぞれ8月と9月に発売され、すでにベストセラーになっている。前作である『海辺のカフカ』のとき、アドバ

ンス制で5億ウォンだった印税は3倍以上に高騰し、当初韓国では10社を超える出版社が版権契約を結ぼうと激しい争いを繰り広げるという珍しい光景が見られた。このように、うなぎ上りになっている日本小説翻訳本の印税状況からは、韓国における日本文学（小説）ブームの高まりが想像できよう。

本書によると、韓国語で最初に翻訳された日本文学作品は、矢野龍渓の政治小説『経国美談』である。匿名の翻訳者により1904年10月4日から『漢城新報』に連載され、1908年に玄公廉（ヒョン・ゴンリョム）が翻訳し単行本として刊行された。当時の両国の関係から、日本の言論人が自国民の政治的啓蒙のために書いた小説が、日本帝国の勢力により国権略奪の危機におかれた朝鮮半島で翻訳され読まれた事実は、当時の韓国人と日本文学の関係の本質を如実にみせている。なお、日本帝国の支配下におかれた植民地期には、日本文学翻訳の空白期であったと言われているが、こうした「翻訳の不在」という文化的現象こそ、植民地支配／被支配という政治現実を最も明確に代弁していると言える。当然のことながら、「翻訳の不在」は、日本文学の受容拒否ではなく、翻訳という仲介過程の不要を意味する。もちろん、当時、日本語の原文で読むことができた彼／彼女らは、中等以上の教育を受け芸術的な教養を身につけている非常に限定された階層であった。また、ここで看過できないのは、彼／彼女らにとって、日本文学は、はたして外国の文学であったのかという問題なのである。たとえば、1934年9月『三千里』（6巻9号）に掲載されたキム・アンソ、ジュ・ヨハン、キム・ギリムが参加した「最近の外国文壇座談会」では、イギリス・アメリカ・フランス及び中国の文壇に関する紹介は設けられているが、日本文学に関する言及は見当たらない。また、ジャン・ヒョクジュの「海外文学輸入の必要」（『芸術』1巻2号、1935年4月）で言及されている「海外文学」という概念においても、日本文学は含まれておらず「朝鮮文学—日本文学—海外文学」という認識構図は、当時では普遍的なものであったという。このように、植民地朝鮮においての日本文学は、高級知識と精神文化、そして文化的権力に至るツールとして機能していた。「翻訳の不在」を迎えた現実は、植民地における文化状況を生々しく物語っている。

1945年の解放直後から1960年代までは、日本文学は少なくとも公的な領域からはその姿を消した。それは、李承晩政権の強力な排日政策によるものであったが、日本文学が朝鮮半島に再び登場したのは、1960年の4・19革命以降である。革命以降、対日文化政策の変化の中で日本小説が翻訳され、日本で1300万部が販売されたという五味川純平の『人間の条件』が1960年に、続いて石坂洋次郎の『若い人』が1961年に翻訳された（1960年からは、日本文学の選集類も翻訳されはじめる）。しかし、この1960年からは、『思想界』（1960年11月号）や『新東亜』（1964年11月号）では、全国の喫茶店やバーで日本の歌が流行し、「草履」を履いた女性が街を堂々と歩き、また書店には日本文学の翻訳物ブームであることが指摘されるなど、「韓国の中の日本を告発する」論考が目立つようになる。このように、1960年以降は、「日本文学の復権」と同時に形成された文壇の否定的な論調もみられ、さらに、こうした動向は、1960年以降における欧米文学の翻訳の活性化により、1980年代まで継続される。ところが、1989年『喪失の時代（ノルウェイの森）』が出版され、韓国の若者世代の間では「ハルキシンドローム」が巻き起こる。村上春樹の登場は、日本文学の地位を格上させるきっかけとなった。春樹ブームに便乗し翻訳されはじめた吉本ばなな、村上龍、島田雅彦、高橋源一郎、浅田次郎、江國香織らの作品は、韓国の読者に、日本文学（小説）に対する印象を強烈に刻印させる。こうして、1990年を起点に日本文学は、韓国読者において特別な外国文学として位置づけられるようになる。

このように、解放後、日本文学は、浮沈を繰り返しながらも韓国・韓国人の読書生活のある一定部分を占めてきた。純文学・大衆文学を問わず、韓国人の成人読書の外国文学読書総量の中で、日本の文学とりわけ小説が占めている比率は最も高い。にもかかわらず、この60年以上に亘る日本文学の受容やその理解が明確にされてこなかったことに対する自覚と反省が、本書の出発点であろう。

2 『ヨーコイヤギ』をめぐる論争

本書のタイトルである「文学」、「近代」、「日本」というキーワードを順番を変えて合わせてみると「日本近代文学」となる。このように「日本近代文学」という制度の構成要素を分節し、タイトルとして定めた理由を、著

者は「文学を通じて日本の近代と日本・日本人に対する理解に近接しようという意図からである」と説明している。そのため、本書は、その記述が明治文学から現代における日本小説、さらに「日本近代文学」の範囲を超えた在日コリアン文学まで幅広く展開されている。序文で「韓国・日本を問わず、一国主義的な言説体系の中に潜められている規範的認識から批判的な距離をおこう」としたと述べているが、こうした著者の意図が最も強調された論考は、第3部である。とりわけ「『ヨーコイヤギ』と民族主義」についての論考は、遠距離民族主義（long distance nationalism）やその「記憶」をめぐる論争について客観的な距離を維持していることは、非常に興味深い。

『ヨーコイヤギ』（ヨーコ・カワシマ・ワトキンス著、原題は『So far from the Bamboo Grove』。1986年アメリカで刊行。韓国語版は2005年「文学トンネ」より刊行。「イヤギ」とは「物語」という意味）をめぐる論争の本質は、戦争記憶の表象に関わった事実歪曲の可否や（韓国人の暴力のみ強調することで）植民地支配の加害歴史についての隠蔽に関するものである。また、注目すべきなのは、発端となった場所が韓国国内ではなく、アメリカ東部であることだ。ボストン近郊に住む在米日系人が書いた自伝的小説が中学校の副教材として採択されたことに対して、在米コリアンが反発し反対運動を展開したのが、この論争の起源であるが、こうした在米コリアン社会の組織的な抗議行動が、韓国国内のマスコミにより報道され、一斉に非難する世論が韓国国内でも飛び交った。結局、この論争は、韓国国内外における民族主義葛藤へと移行していく。皮肉なことは、『1Q84』の出版社でもある「文学トンネ」が、『ヨーコイヤギ』を出版した当初は、3社以上の新聞社から「反戦平和小説」として評価されたことである。たとえば、『東亜日報』の場合、著者と翻訳者との対談まで実現するほどの騒ぎであった。論争後、出版社側は「『ヨーコイヤギ』状況に対する文学トンネの立場」をホームページで掲載し、その出版経緯を「「日本民族＝加害者」、「わが民族＝被害者」という既存の民族主義的な観点においては十分に論議されて来なかった「女性に加害される戦争暴力」の問題について、考えさせるきっかけとなると判断した」と説明した。ところが、世論による抑圧のために、発売中止という決断に至ったことは、出版当初の「開かれた視点」が持つ摩擦抗力が、結局のところ、民族主義の吸引力に対する耐性を持たなかったことを意味している。本書は、この『ヨーコイヤギ』をめぐる論争について、上記のような外部的な要素に対する指摘を踏まえた上で、小説に根底にある主張、すなわち「いかなる場合でも正当化できない反人権的な暴力」への批判をきちんと評価した。なお、個人の記憶が、「戦争や植民地支配のような国家単位の巨大暴力に関する忘却の中で再現」されている点についても、記憶の政治学のレベルから論議すべきであるとの指摘は、この小説のテキストとしての可能性を導いてくれたと言える。

本書は、序文及び3部24編の論考の構成である。第1部「韓国人と日本文学」では、日本帝国下植民地期から現代までに至る歴史的な流れの中において、日本文学と韓国人との関係を展望する。第2部「日本文学と近代」では、明治維新をきっかけとして、実質的な皇権統治の道を開いた日本の天皇制とそれに起点をおいている日本の近代文学を考察する。第3部「玄海灘断想」では、日本・日本文学と関わる最近の現象に関する論考となる。なお、解放後60年間、韓国における日本文学の受容に関する包括的な理解のために、著者の尹相仁氏が若手研究者とともに、10年以上の年月を重ね、その資料の構築から総括的な分析まで行っている『日本文学翻訳60年現況と文学：1945－2005』（ソミョン出版、2008年）もぜひご覧いただきたい。

（2009年6月19日、文学と知性社刊・ソウル、398頁）